

神と神話と政治思想

大西藤米治

目次

- まえがき
- 一 天地創成
- 二 神的夫婦
- 三 神の起源
- 四 神の種々相
- 五 神話に生きる神
- 六 神話の象徴
- 七 政治と神話のむすびつき
- 八 こしらえた神話
- 九 神話と政治思想

まえがき

政治思想史の研究の出発点において、注意すべきことは多々あるであろう。これらを今ここで一つ一つとりあげて

みることは避けようと思うが、唯、いかなる方法をとろうとも、政治思想の歴史的起源の問題を探るときに、原始的な思维のなかに「神」の問題がどのようなかたちで織りこまれていたかをとりあげないわけにはいかないだろう。しかも、原始社会や古代社会のひとたちの日常生活のなかで、その神が現実にとどのような位置を占めていたかという問題は、信仰体系のなかにあらわれている「神」と、つくりだされた「神話」のなかに出てくる「神」との相関関係、あるいはその二律背反関係にまで、どちらも分析され、掘り上げていかねばならない問題でもある。

そしてさらに重要なことは、これらの問題の追求が、横のひろがりにおいてなされねばならないということである。比較的思想史的研究という、極めて困難な方法を避けることができなくなる所以である。それだけにヨーロッパとか、アジアとか、あるいは日本とか、限定された地域における研究は、それぞれ、部分的には掘り上げられつつあっても、まとまった比較思想史的研究は、一向に進められていないのである。もどかしく思われてならない。

本論文は、この方向への一つの試論にすぎない。学生諸君に配布されている雑誌の掲載を考え、できるだけ平明に論究していきたいと思っている。

一 天地創成

地球の創成は四十五億年まえといわれる。気の遠くなるような話だが、その太古のむかし、この地球ができた。それから数億年を経過して、今度は人間ができた。あとから発生した人間は、この世のはじまりについて、それをどの

ように考えただろうか。それを神話から敷衍してみよう。

神話の世界は、小宇宙^{マイクロコスモス}を単位として構成される。なぜなら、むかしのひとたちは、見たり、聞いたり、行なったりして、知得できる行動半径が、ごく小さいな範囲にかぎられ、そのなかでそのひとたちは、それなりに、みずからの仲間たちと、それだけで世界を構成し、それを、この世のすべてだと考えていたからである。天と地と人間のすべてを含んでみても、広さでは、最初、そのひとたちの構想できる小宇宙は、日本のなかでも、そのなかの「どの地方」といった小範囲のものであったろうか。今日でいう、いわゆる国家や民族が、思惑の単位になるほど大きく拡大したのは、よほどあとからとみてよい。

換言すれば、むかしのひとたちは、それぞれ住む世界を異にしたことになる。だから、そのひとたちでもっていた神話も、それぞれ違ってよいわけである。

日本では、この世のはじまりを説いて、日本書紀の本文で

「いにしえ、天地いまだわかれず、陰陽^{めづ}わかれずあるとき、渾沌^{まろか}たること鶏子^{とりこ}の如く……」

と書きだしている。すなわち、この世の中のできたては、最初、あぶらの浮いたように、ぶよぶよした状態だったのが、あとで天地に二分されて、それが豆腐のようなやわらかいものとなり、それがまたしだいにかたまってきたのだとなっている。今日、地球物理学でも、地球の起源に関して想像されている有力説に、最初、ガス状物質が太陽系の一環として回転しているうち、しだいに集積し、固形化していつか地球になったとなすシュミット説 (O.U. Schmidt,

1933)があるが、これが真説とすれば、人間の知慧は、むかしもいまも、さして進歩しないもの。この日本書紀の記録も、いつけん、なかなか合理的にみえるが、惜しいかな、それは当時のひとたちが一般にそう思っていたというのではなくて、シナの歴史文献「淮南子」などから模作した、日本の知識階級の剽窃作文というのが学者の定説になっている。シナのそれにも似ているからである。

が、それはともあれ、そんな混沌のなかから、いくにんかの神さまがでてきて、やがて伊耶那岐・伊耶那美という二柱の神に、いま一度天地の開闢をゆだねるのが日本の神話である。古事記と日本書紀とで、多少のかたりつたえに差はあるが、すじがきは周知のように、

イザナギ・イザナミの二神はアマツカミ(天神)の勅命をうけ、タカマガハラ(高天原)から天浮橋をくだり、玉矛(たまほこ)で海中を探ったとき、矛のさきから垂れた塩が、かたまつてできたのがオノコロジマで、その島に降り、そこに御殿を建て、天の御柱なる神の座をもうけ、アマツカミの照覧と加護を仰いで国生みをなした。

ことになっている。今度は「塩がかたまつて島になった」となされている。が、それはともかく、この神話がさすタカマガハラは、さしずめ「天」を意味し、アマツカミは空にまします天の神さまで、オノコロジマはそのころの私達の先祖の視野からすれば、日本島の一部以外になにもなかったろうから、目にみえる地上のいっさいということになるうか。つまり、この神話は、日本国のあけぼのがイザナギ・イザナミ二神によって開幕されたことを、素朴なうちにも、おおらかに言いきっているわけだが、それが天の神さまのさしずによってできたことをとりあげるとき、政治的に国の統治方式についても、ちよっぴりその大方針をのぞかせたことをみのがしてはならない。

ギリシャ神話でみてみよう。小アジアのキュメに生まれ、ヘリコン山麓に牧人としてくらした古代ギリシャの叙事詩人ヘシオドス^①は、彼の詩帳「創生記」を書くにあたり、まずはじめに、詩歌の女神たちへ呼びかけてから、ギリシャ神話の主神ゼウスをたたえ、つぎにこの世のはじまりについて、

いかにも最初に、まずできたのはカオスで、それから今度広い胸幅をした「ガイア」(大地)ができた。万物のとわに揺がぬ座であるところの大地が……。

と、うたいだしている。ここというカオス(Chaos)とは、本来、Chaが(ギリシャ語の)「口あけ、隙間をつくる」という意味だから、それから判定して、「空間の隙間」、乃至は「無限大」といった意味にとって「霧たちこめる無限のひろがり」とでも解されようか。そんな空間にガイア、即ち大地ができたことをのべ、それをこの世の黎明となしている。そして、これを詠んだそのあとで、この大地の神

ガイアは、先ず第一に、みずからと同じ広さの、輝く星をちりばめたウラーノス(大空)を生んだ

祝福された神々のために、永遠に堅固な王座を、それでくまなくおおい、至福な神々に永劫に、ゆるがぬ座を設けるために。

またガイアは、樹木のしげる山にすむ女神ニンフたちのいる住家や高い山々を生んだ

そして……更にまた大波あれる大海ポントスも生んだ

と詠んでいる。これが、古代ギリシャという天地の創成にもあたろうか。こうして宇宙の大神ができてから、ガイアは、地底の神ゲールロスや有名な美しい愛の神エロスなどを生んでいる。

かくてヘシオドスの思惑は、それ以後、天の神と地の神を夫婦にみたてて、この配偶神からその家族をはじめ、たゞさんの神話の神を生ませる構成をとっている。

注

① ヘシオドス (Hesiodos) の在世は前七〇〇年頃、生死年月不明なるも、この頃の思想をあらわすものとして、彼の詩帳は重要視される。また一説には、ひとりの人ではなく、数名が連続して記帳したのではないかなとす学者もある。

インド・アーリヤ人の最古の思想をあらわすものとして「リグ・ヴェーダ」があげられる。史上、この文献はバラモンの僧侶たちが、ときの王侯・貴族を擁護するため編纂したといわれるが、そのなかで宇宙の起源をあらわす代表的なものとして、有名な「ナーサット・アーシートヤ賛歌」があげられる。ひろいよみしてみよう。太初において

一、そのとき無もなかりき、有もなかりき。空海もなかりき、そをおおう天もなかりき。何物か活動せし、いずこに、たれの庇護ひだのもとに。深くしてはかるべからざる（宇宙創成の最初の物質としての）水は存在せりや。

.....

太初において、暗黒は暗黒におおわれたりき、一切宇宙は光明なき水波なりき。空虚におおわれ発現しつつありしかの唯一物は白熱の力によりて出生せり。

.....

たれか正しく知るものぞ、たれかここに宣言し得るものぞ、この展開はいずこより生じ、いずこより来たる。諸神は宇宙

の展開よりのちなり。しからばたれか展開のいずこよりおこりしかを知る者ぞ。

.....

この展開はいずこよりおこりしや。彼（最高神）は創造せりや、あるいは創造せざりしや。最高天にありて、宇宙を監視する者のみ実にこれを知る。あるいは彼もまた知らず。（無有歌十、一二九、辻直四郎博士訳、以下同じ）

なかなか論旨のすすめかたが妙をえて、哲学的な構成ぶりになっている。

リグ・ベーターの編纂は西紀前一、〇〇〇年（前一、五〇〇年から前五〇〇年と推定）の頃といわれる。これを日本の神話にくらべてみると、古事記が奈良朝の和銅五年、西紀後七十二年編纂になっているから、日本の方が逆に一〇〇〇年から一五〇〇年以上も新しい勘定になるわけだが、それでいてふるいインドの方に、かえって万物の起源を追求する、元論的、思考さえうかがえるのはなぜだろう。だが、さすがインドは哲学のメッカ、仏教発祥の地だから、その苗床的バラモンの土壌には格段の相違があると感心するのは早計である。なかなかどうして、よその国の神話同様、この国でも神界では、たくさん神さまがそれぞれ勝手なふるまいや、とつぷい、しもない、けたはずれをやらかす場面もみられるからである。

二 神 的 夫 婦

さきにあげたヘシオドスの賛歌を、いま一度ふりかえてみよう。ギリシャ賛歌では、天と地を夫婦にみたてて、

その配偶神からたくさんの子供を生ませるモチーフがあつた。ところで、このように、天地の創成を夫婦の合作とみなすモチーフは、日本の場合にも適合する。本居宣長は、国生くみうみの大任をゆだねた神さま、イザナギ・イザナミという二神の名称について、イザは誘うの意味で、ナは汝なんじ、キはミの女性に対する男性の表現とみたててから、二神が、似あいの夫婦であることを説明したのち、女神の

「ああ、うるわしく頼もしい背の君よ」

というやさしい誘いかけに呼応する、男性の

「ああ、いとおしい若草の婦つまよ」

と、こたえる愛のささやきがあつて、やがてできたのがオノコロジマであり、それが日本国のはじまりだと解説している。

南アフリカで、クマナ族がつたえる天地の婚姻については、ドドナのプレアデスの賛歌があげられる。

天こそ、まさにわが父、地こそ、まさにわが母

その天は雨を降らして、大地をゆたかにうるおし

その大地は、それによって穀物こくぶつと牧草をはぐくむ^②

と。単純ながら、天地を夫婦にみたて、子供の立場から父母の恩にたとえて天地を賞讃している。

注

② Krappe, *Genese*, p. 78.

ギリシャ神話では、ホメーロスの賛歌が、この大地の神に

それ、わがことほぐ大地は毅然として王座につけり

万物の母なる大地、ありとあらゆるものをそれにてやしなえる尊き大地

そは、われら人間に、遠い祖先から生計をあたえる

されば、われら人間のいのち、如何になすとも、それこそ一途に汝の手中にある

汝、すべからく善意をもって、汝の愛する人間に幸を与えよ

かくてこそ、われらの生命をやしなえる土壌は収穫にて富み

牧場には家畜の群さかえ、家は財にて富みさかえん^③

まさしく大地を母にみたてて、その偉大さを賞讃し、五穀豊穰を祈念した詩だが、ここでは天を父にみたてる思考は間接的にしかあらわれていない。

注

③ To Earth, l. ff.

天地の創造を配偶神にゆだねる神話のほかに、そうしてできた天地をさらに神婚のかたちでむすびつけ、それを神話におこむ方式は、インドネシアからオセアニア、アフリカ各未開種族をはじめ、世界のほとんどの文化圏民族にまで普遍する中心思想でもある。天を男性になぞらえて、それへ最高地位を賦与する神話では、地にその好伴侶とし

ての妻女の役割があてがわれる。古代人にでも、すぐにうなずける単純なこと、それは陽光と慈雨を天空がもたらし、大地がそれを受けいれて、作物をみのらせ、家畜をふやす方式の天地の協力ぶりであるが、それがまさしく夫婦の協力による子女の育成に対比して、あまりにも似ていることであつた。

したがって、こうした賛歌の詩形もまた、住む地域や民族の相違をこえて、大同小異、わずかに表現のしかたが違ふなかに、いずれも農耕についての作物の豊饒さを願うところが、この夫婦神にこめられることで、共通する。

三 神の起源

前項では、この世の中のおこりを神話の世界からながめてみた。ところが、最初、神が果してこの世や人間をこしらえたのか、それとも人間が神をこしらえてから、その神の手でこの世をこしらえさせたことになるのか、その手順はともかく、神話を祖上そじょうにする以上、かんじんの立ちまわり役を演じてくれる「神」がなくては話にならない。にもかかわらず、これまでその神について、まだ触れていないのである。

神の起源については、学問上、つまびらかでない。が、だいたい推定できるおもだったものをあげれば、次のようにならう。

神の発見、その一の場合

あさ、東の空から太陽がでる。ひる、さんさんとして陽光がかがやく。夕日がしずんでから、夜空には星がまばた

く。ときおりは、雨にもめぐまれる。まれには、ひでりや暴風・洪水といった自然の驚異も交錯するなかに、そうした障害をのりこえて、動植物はたくましく成育する。

こうした環境の毎日が連続して四季となり、四季の経過は年輪を積みかさねる。これが太古のむかしから、未来永劫へと連続するとき、古代人の素朴な感覚といえども、この宇宙の気宇壮大さに、なにかそこらに豊かな活力の源泉があることを気づかないわけがなからう。彼等は、そのエネルギーのに、ない、手に「神」なる称号をあたえ、無条件にこ、べを垂れたのである。こうして人間は最初の神を発見するわけだが、この神は本当にまだ端緒で、靈魂をやどらせる神までには成長したものではなかった。したがって、この程度の神では、それだけで宗教をもつまでには展開されない^④。

古代エジプトでは、太陽神を「ラー」という。エジプト人は、天をあらわすとき「ヌト」という神の名をあて、大地をあらわすとき「ゲブ」と呼ぶ神の名をもってきた。インドでは、太陽の名神がブアルナカスールヤと呼ばれる。地の神がブリテイヴィ。そのもとじめの創造主をあらわす総帥格がヴィシュヴァカルマンで、この名称は天・空・海、それに水界をあらわす神インドラや太陽神の別称ともなっている。いま、このヴィシュヴァカルマンを賞讃した賛歌をあげれば

インドラよ、なんじは卓越せるものなり。

なんじは太陽をして照らさしめたり、

なんじは造一切者（ヴィシユバアカルマン）なり。

一切神なり、なんじは偉大なり。（リグ・ベータ、八・九八・二二）

と。まさしく創造主である神への偉大さを着目した賛歌である。

注

④ P.W. Schmidt によって主唱された原初的一神観説 (Urmonotheismus) にあたろう。これは人類最原初の文化時代における神に対する觀念をあらわすものであり、即ち創造主を対象する高級な至上神 *Hochstes Wesen* の觀念が極めて顯著にあらわれる思考がこれにあたる。下記の書参照 Schmidt, *Der Ursprung des Gottesidee*, 1912.

神の發見、その二の場合

古代人にとって最も不思議なこと、それは子供が、どうして生まれるかということであった。それには山間の岩の裂け目、洞窟や谷間にあった胎児が、なにかのまじないによって母の胎内に挿入されると考える呪術説、^{チイルディンフセス}「子供の祖先」といった靈魂もどきのものが、どこかの宇宙圏のある場所に住んでいて、母の胎内からうぶ声をあげるとなす靈魂説^⑥、また、胎児は祖先の誰かの化身で、母親はただ胎内を貸すに過ぎないと解する化身説。いろんな迷信やおもわくが横行した。

受胎について、その肉体的原因が知らされる以前、人間の思索を超えるものとして、子供の由来は、私たちの祖先

に大きくのしかかった問題だった。それをどうやって解決するかは、いわば生命の神秘にも通ずる難渋と対決することであった。

そうした生の神秘に対照するもので、「生」よりさらに不思議な現象に、人間の「死」がある。死は生命の誕生とは逆に、残酷であり、すべての終焉^{しゆうえん}でもある。そこで人間の知慧は、その問題解決の方途として、人間という生物の構成を、肉体と靈魂とにわけけることを考えた。かくて靈魂の存在を措定^{そてい}した人間は、さらに人間以外の生物や無生物にまで、その靈魂の存在を拡大してゆく。⑥ こうして自然をとりまく木や石、山や池、日陰^{ひかげ}や泉のような、人間生活に関連するあらゆる自然物にまで精靈の存在がみられるにいたったのである。⑦

日本の農村で、鎮守の森にある大きな樹や石にメ縄^{しなな}がかけられたり、奈良の春日の神苑に鹿がかわれたり、ふるびたやしろに、神馬にかわって絵馬の額^{がく}がかかけられたり、民家の井戸や、かまどに護府が貼られたりする。これらはみな、神靈転化のなごりである。

また、こうした神靈が進化して、それぞれ独立した一柱^{はしら}の神になった好例に、前述のインドの神があげられる。インドでは、神の数はかぞえて通常三三三神。多くかぞえて三三三九神以上ともいわれ、これらの神が天・空・地の三界にわたって配置されている。上述した神々のほかに、天界をあらわす神にデイヤウス、風神としてヴァーユ・ヴェーダ、雨神としてバルジャーニヤ、河川神がシンドウ、火の神がアグニといったぐあい。ねんごろなことには、太陽神でもそれをさらに作用べつにわけて、万物の活力を高揚するものがサビートリ、動植物を繁茂育成させるものがプー

シャン、太陽光線がビーシニヌといったように、神が細分配備されている。そのほか、曙光をあらわすものにウシャス、夜の神にラートリ、言葉の神がヴァーテュ、怒りいかりの神にマヌユ、酒の神がソーマ、といった調子である。

注

⑤ そんなときの宇宙圏は、ペルー人では山と石であり、概してヨーロッパでは泉や川や木からなどとされている。

⑥ 無生物に靈魂を指定した場合は、これを靈魂と呼ばずに通常「精靈」spiritと呼んでいる。

⑦ こうした思考をあらわす学説が Edward Burnet Tylor によつて主唱される Animism (精靈万有) 説であり、それはラテン語の Anima 即ち生靈から転化した語から出たものである。人間は生・死・夢・幻映などから生命の原理を案出し、Soul (靈魂) から spirit (精靈) を案出して、こうした方式を自然物にまで及ぼすものである。そしてこのようにして靈的存在を幾多のものに認める信仰は、多靈教 (Polidemonismus) から多神教を経て、やがて一神教にまで進展するとなす展開方式を説く学説である。下記の書参照 Tylor, Researches into the Early History of Mankind, 1865.

神の發見、その三の場合

古代シナでは、落雷で死んだひとが、最も因業いんな最後をとげたことになっている。なぜなら、それは鬼神のいかりにふれ、特定のひとを指して、とくに天が落雷させたのだから、そのひとこそは、よほどの因果の報むくいだという根拠からである。まことにもつて、あてはずれの論理だが、雷が天の指令する鬼神の仕業だと間違えられたところに古代性がある。といつても、隣国のシナを笑うわけにはいかない。日本でも、ふるくから、地震を「なます」の仕業しわざだとす言い伝えがある。静かな大地が、突然ゆれるのだから、地震は「なます」でなくとも、大きな生きものが地中にあって、大地をゆさぶるためにおきるとす言い伝えは、うなずける考え方である。

暴風、しけ、つなみ、ひでり、洪水、こうした天災のすべてに超自然的神秘性を想定し、それを神のせいにする。いわば「力あるもの」を恐れる觀念が、神の存在を認める根拠となつて、その超自然的活力に人格性を附与し、これを「神」となすわけである。したがつて、これは、前述の「その一」、「その二」の二例を一緒にしたようなものにあたるが、そうした超自然への人格性の附与はとりもなおさず、それが靈魂の是認であり、こうして結局、これから宗教が発生したとなすの論理である。^⑧

インドのつぎにかかげる賛歌は、その意味で、神に対する人間の呼びかけを素直に表明する。ブラジャーパティは、創造主をあらわす神である。

ブラジャーパティよ、なんじをおきて、この一切万物を抱持せるものは他に存在せず。いかなる願望をもちてわれらがなんじに供物をささげるとも、そをわれらにかなえよ。われらをして、富の主たらしめよ。

(一〇・一一・一〇)

この賛歌では、超自然を人格神にみたてるわけだが、既にその神は立派に成長し、それへの祈りはまた御利益^{りやく}の懇願をもかねるほどの強さに成長しているのである。

注

- ⑧ この思考を代表するものに Robert Ranulph Marett (1866—1943) を中心とする先精靈万有説 (Preaminism) がある。これによれば、当初、人間が感ずる宗教的経験のうち、理知的な靈魂觀以前に驚異 (Awe) の情があり、それが動機となつて神が発見されるとなすわけだが、その場合、その対象されるものは神秘的超自然力であるとされる思考である。

Cf. Marett, *The Threshold of Religion*, 1909.

四 神の種々相

こうして、なんらかのきっかけで人間世界に登場した神だが、では、これらの神は果してみんな同じ神なのだろうか。どうして、同じどころか、きっかけが違ふように、そして登場させた人間が違ふように、それらの神々は千差万別である。由來、「神」という言葉が意味する概念だけをとりあげてみても、同じ文化圏の日本とシナでさえ、その内包するニュアンスが違ふ。シナの「神」Shen は、日本の神と違って、広く神祇とか God とかいう意味よりも、むしろ精霊 spirit 精神といった意味の言葉にあたり、日本の神にあたる神祇については、シナでは天とか上帝 shang-ti といった言葉がそれに該当する。まして日本の神は、古代イスラム教やキリスト教が、たとえ民族の相違を超えて世界一神を主張したとしても、ヤーフェ信仰の神とも違えば、キリストの神とも、とても大きく相違するのである。

注

⑨ 即ち、天の至上帝 (Shang-ti) は絶対神を指し、それはエロヒム (elohim) テオス (theos) ゴッド (god) にあたるが、これに対しシナの神は、聖書ではハウフ (hauch) プネウマ (pneuma) と解する(原田敏明)べきであらう。

また言葉ではおなじく神といっても、信仰に対象される神、力にみちた人格神で人間の幸・不幸を左右するような神、それらの神についても、そのイメージは、それぞれ信仰する相手の人間によって相違する。

前五〇〇年の頃、ギリシャのイオニヤに輩出した合理主義の哲学者クセノファネスは、こうした神の相違性を取りあげて、

若し牛や馬や獅子に手があつて、人間のように絵をかくことができるとすれば、神のすがたを、馬は馬なりに馬の絵をかき、牛は牛なりに牛のような絵をかくて、神さまを四つ足の牛や馬と同じものにききあげるだろう

と。ひとによる神のイメージの違いを皮肉った言葉である。したがって、国家や民族の相違もまた、それなりに神に反映する。

エチオピア人は、その神のすがたをしし鼻をした黒ん坊だというだろうし、トラキア人は、その神を青い目をしした紅毛の人間にえがくだろう。

さしずめ、日本人なら黒目、黒髪、鼻低く、胴ながの神像をえがくだろう、ということなのである。

このように映像の相違するほか、神は、さらにその機能や効能も相違するものとされている。概して各民族に共通する神の機能は、正直な人間にとっては常によい友であり、よい庇護者であり、よい擁護者でもあるが、人間の犯す悪事に対しては神は厳肅に処罰し、容赦しないものとされている。「神罰はてきめん」だが、贖罪すれば赦免されるといった性格のもの。そんな神が、たいていの民族に共通するありふれた神の機能である。そしてまた、人間の神への祈りは、その加護が目的で、神を賞讃することは、それからの報酬が前提として期待される^⑩。

我に与えよ、我なんじに与えん

我に捧げよ 我なんじに ささげん

我より享けよ 我なんじより享けん

(タイツティリヤ・サンヒター一・八・四・一)

そしてやがては、神は、祈りと称讃に対しては賢明に慈光を垂れ、敵を征服してすら財宝と名声をもたらしてくれるものとされてしまう。人間は、そんな加護を神に期待してしまうのである。とすれば、仇敵どうしで同じ神に祈ったとき、その神はどんなことになるのだろうか。そんな矛盾にも、とんちやくせず、人間に都合のよい性格に、神は描写されていたのである。

注

⑩ この思考は、日本の創聖「宮本武蔵」などのいう「神仏は敬うやまつて、而も頼たのまず」となす思考に対立するものである。

五 神話に生きる神

日本には「八百よろずの神」がましますといわれる。インドにも、前述したように、たくさん神がいた。ギリシヤ、ローマ、エジプト、バビロニアなど、古代国家の宗教はみな多神教である。人間は、それらのたくさん神々を、最初は無差別に崇拜する段階から、やがては神々に序列をつけ、上下の階層にかけて整備する方向へ進むわけだが、こうして人間から信仰される「神」と、神話に登場する「神」とでは果して同じ神なのだろうか。よろずの神々のう

ちには、宗教的な尊敬をともしない神もあろうし、人間生活への影響といった点で現実に見捨てられている神もあろうに、だのに、それらの神たちは、いったいどうして人間の話題からいつまでも消えないのだろうか。

実は、それらの神こそ、神話のなかに生きている神なのである。言葉をかえていえば、神話にでてくる神は、宗教的な崇敬とは必ずしも一致しない神であって、神の特性である超越性をそなえながら、反面、人間らしく行動する神、そんな神が神話のヒロインなのである。^⑩

注

⑩ 日本の神話に関する限り、神話の神が、宗教的信仰に対象される神と一致する場合をみることが多い。しかしこれは、神話の神としての本来的なものではなくて、たまたま奈良朝時代、記紀により作爲された神話の神が国家統治・地方統治に關聯して各地の神社に祭神として祀られたからであって、そうした關係上、尊崇をとものう場合が多いのである。

むかしから、どんな民族でも、伝説や民話といったジャンルのない民族はない。神話はそれらのうち、超自然的な神の活動が主役となった伝説や民話を指すのである。日本の古事記、ヘブライの旧約聖書、ホメロスやヘシオドスのギリシヤ神話、これらのうち、たとえすがすがしさが事実と対立したフィクションでも、むかし、神話の世界に生きた人々は、それをみな事実と思って語りつたえてきたのである。それは論理の反省といった、まだ理性の選別を経験しない、文明最初期における素朴な意識が生んだ、ごく自然のうちにできた産物である。

これらの神たちは、一般に当時の生きた人間をモデルに、それを美化し、超人化して、できたものとみてよい。したがって、人間的色彩を多分にもちながら、とはいえ、神である以上、不老不死、神妃はもたされても、子孫はきま

った数しか増殖しないことになっている。ときには争い、ときには団欒しながら、それぞれ独自の領域で活動するものとなっている。しかもそんなすがきの中で、人間同様、美酒に酔うこともあれば、人間の好む御馳走を賞味したりもする。いわば、俗事と神事をまぜあわせたのが神話の世界である。

ところが、こうした神話のなかでも、ギリシャ神話となると、神達のふるまいや行動が、ぐっと人間世界に接近してくる。なかには、かえって神界なのに、人間世界の悪い裏面を、ひんぱんに登場させる場面すらみられる。遍歴詩人クセノフアーネスは、神話がホメロスやヘシオドスの手を経て整備修正された事実をもとに

ホメロスやヘシオドスは、およそ人間世界における恥辱ともいえる盗みや姦通、人間相互の欺瞞といったものを、神の世界にうつしている

と。神を、あまりにも人間的レベルにまで、ひきずりおろした過度行為への難詰である。

日本でも本居宣長は、神話にでてくる神々について、その著「古事記伝」で

日本の神々には貴きもあり、賤しきもあり、強きもあり、善きもあり、悪しきもあり、外国にいわゆる佛・菩薩・聖人などと同様の考えで神を論ずるのは間違いである

と。ここでのいう外国の神は、信仰上の神、日本の神は神話上の神、けだし、信仰する神と、神話の神とを区別した名言である。これについては、われわれ俗人でも、神話の世界に生まれれば〇〇の尊、〇〇の媛と呼ばれるのだとおもえば、うなずけよう。

六 神話の象徴

由來、ミュトス (mythos 神話)^⑨とは「言葉」とか、民間伝承の「話されるあるもの」といった意味のもの。これがのちに話だけでなく、彫刻、ないし絵画となつて造形化される。いわば神話の造形化だが、これがまた民族を象徴する特性ともなっている。

古代エジプトでは、概して神話が、動物のかたちで比喩的にあらわされる。人間の創造主はカエル、かまど寵の神は小人^⑩、その他アヒル、ネコ、ウシ、オオカミ、ヒツジ等、いろんな動物が、それぞれの神のシンボルとして用いられる。こうしたシンボルは、なかなか愛きようがあつて特異なあじを示すもの。あわせて当時は、動物崇拜がきわめて広範囲の信仰だつたことをあらわしている。

これに對して、ギリシヤ神話では、神体そのものが人間化され、人間的性格がそのまま神像に反映している。たとえば神々の支配的表者であるゼウスには、いかにも威嚴と莊重をよそわせ、常に王者の貫録をそなえさせると同時に、その妃神ヘラには、堂々たるギリシヤ美人の英知を兼備した典型があてがわれる。またアポロンはたくましい好青年、アフロンティアは絶世の美女として写しだされるのが常である。

ところで、こうした神の映像も、時代がくだつてギリシヤ末期からローマまでくると、さらに人間的表情を一段と濃厚に写しだすようになる。そして、神と人間とのけじめは、その後もしだいにうすれていつて、ついには完全な人

間的表現に一致するのだが、それがローマ末期になるうか。それゆえ、中世以後は、神話の造形化は完全に消滅して、そのモチーフのみ文学や芸術のなかに生かされるわけだが、その意識は、かえって、西欧文芸の中枢にまでしみこんで、その特性を遺憾なく発揮するのである。

注

⑫ myths はギリシャ語の muth から転化したもので、「言葉」という意味とか、「話されるあるもの」という意味に用いられる。

⑬ そのほかパスステイの神パシウトはネコ、メンフィスのアピスはウシ、シオートのハーピスはオオカミ、メンデスのバーは羊といったように、エジプトでは神話的内容が比喩的に象徴されている。(富永惣一)

七 政治と神話のむすびつき

無邪気に、民族に伝統する炉辺の語り草、それだけがかたまつて神話となったものなら罪はない。ところが、人間の歴史は、逆に、この自然発生の神話を故意に、でっちあげるから、ことが面倒にある。神話が、ときおり時代の脚光をあびて、やかましい論議に対象されるのはそのためである。

なぜ、でっちあげられるのだろう。いや、なぜ、でっちあげねばならないのだろうか。ひとくちにいつて、それは国の統治に効果あるからであり、統治するものが、みずからの權威擁護に好都合な寓話ぐわをこしらえて、それを在来の神話にまぜこんで民族的信仰をからませれば、民心服従作戦に利用できるからである。そうした意図で、でっちあげた

神話でも、時代が経過すれば在来の神話同然、こげが生えて真偽のほどがわからなくなる。わからないままに、信ずる国民は、おのずと統治者擁護の片棒^{かた棒}をかつく。神話論議がめんどうになる所以がそこにある。^⑭

注

- ⑭ 国の政治上、人間統治に神話が必要だとす根拠として、政治体制を維持するために必要な基本的な政治的象徴の型が政治でいう神話だとす学説がある。この思考は、マルクス(Karl Marx)のいう所謂イデオロギー、モスカ(Gaetano Mosca)のいう政治公式 *political formula*、パレート(Vilfredo Pareto)のいう派生体 *derivations* などで、これらはすべてこうした政治社会の基底における信念体系 *belief system* の機能と効果に着目したものにはかならない。即ち、およそ国家統治には、統治する側も、統治される側も同じ人間である以上、本来的にはどちらも平等であり、自由であるべきにもかかわらず、一方が統治する側にまわって自分と同格の人間を統治する任にあたり、他が統治される側にまわされてみずからの自由を棄て、自分と同格の人間に服従するためには、そこに、どうしても統治する者に対する畏敬と信従が必要であり、その場合、統治する者へのハクづけと統治される者の黙従精神涵養には、神話が最も効果的だというのである。このことについては、現代の政治学において重要な意味を与えられて論究されている政治権力の正当性の諸根拠 (*Legitimatisgründe*) を想起すればあきらかであろう。

日本で神話といえば、それを代表するものにも天孫降臨がある。^⑮ すじがきでは「天から人間が降ってきた」というのだから、まことにもって不合理な話で、現代っ子には、とうてい納得のいかないことだろう。ところで、神話は幼いころから、炉辺で語られるのが効果的とはいえ、この神話が、戦前には、本当に、小学校で教えられたのだから、隔世の感がある。

注

- ⑮ 津田左右吉博士は日本の記紀に出ている天孫降臨を含む神代の記録を宗教的意義での神話ではないとみなしている。その理由は皇室の地位の由来について、それを合理的に基礎づけるため官府の手によって工作されたからとなしたことによる。「古事記及日本書紀の研究」・「神代史の研究」等）またこれらを神話ではなくて、説話として扱っている学者もある。

昭和十八年（一九四三年）の国民学校初等科国史上巻には

「天孫は多くの家来をひきい猿田彦にみちびかれて日向の高千穂に降臨した」

となっている。これでは、神話が歴史上の事実として、教えこまれたことになる。それくらいだから、それとは別に、高天原の所在についても、いろんなせ、ん、さ、く、がなされた。新井白石ほどの学者ですら、高天原を「海のかなた」の現実の地と考え、またあるひとは、常陸の大洗海岸から磐城の小名浜海岸にかけての海岸を指すともいい、そのほか近江説、大和説、沖縄説、南方説、北方説（満洲・蒙古）等、いろんな俗説が論議されたほどであった。

けれども、空から人間が降ったといえは大げさだが、天から神さまが降ったといえは、うなずける話である。「常陸風土記」にある「常陸の賀毗礼の峰」に神さまが降りた話、出雲風土記にある「出雲の宇夜の峰」に神さまが降りた話、その他世界各国の高山・霊山のてっぺんには、神さまが降りる天との通路があると信じられていた。神話のすくないシナでさえ、昆論山（こんろん）の峰には天に通ずる巨大な柱があつて、ときおり天帝がそれをくだって地上に降臨するといわれ、ギリシヤ神話では、オリンポスの山峰に大神ゼウスのあまくだる通路があることにさえなっている。

また天から降りてきた人間が、地上の支配者になった例も珍しくない。朝鮮がまだ三韓といったむかし、新羅（しんら）の国

王赫居世は、もともといなずまのように天から揚山に降ってきたことになっているし、任那の加羅国王も亀茲峰に降りてから、加羅の少女と結婚して国王になったとされている。天孫降臨説は、こうした天神降臨と、その降りた神の地上支配をむすびつけて、シナ儒教説にいう「天子は、天帝の指図をうけて、地上国家を統治する」の図式にならない、日本統治の基礎づけのためあみだした神話と思えば、さほどとつびでもなからう。

八 こしらえた神話

無邪気な、自然発生であるべき神話を、故意にあみだすというから、抵抗を感じるようになる。だが、いくら自然発生といっても、神話は、もともと誰かがこしらえたもの。こしらえるとき、そこに当然、作者の意図はもられるわけである。

いまから二千数百年のむかし、その頃のギリシヤ人は、この世の中にかず知れぬ大勢の神々がいて、その神たちが人間世界を動かし、人間を働かせたりゆさぶったりして、自由に人間の運命を左右するものだと考えていた。そこで神話では、これらたくさんの神々のうち、その最もおもだった神ゼウスに、神界すべての同意を得て「その共同体の主宰者たる資格」があたえられ、すべての神々は「その指揮にしたがう」構成になっていた。そして山頂にある「鋼鉄敷くゼウスの宮居」では、もろもろの神があつまり、「朝な夕なに宴を張り」、かつは「世上万端を処理するため、いつも会議がもよおされ、神たちの会議制」にもとづいて、神界の「あらゆる処置が決定された」というのである。

とはいっても、そこに集るもろもろの神とは、「あるいはゼウスの兄弟姉妹であり、娘や息子たち」となっているから、會議といつても謂わばオリンポス一家の家族會議のようなもの。それでも神界統治が、この會議にかけた決定事項にもとずいて運行されたことを、ギリシヤ人は、ほこりに思い、それを神話におりこんだのである。

では、統治体制として會議制が、ギリシヤでは、そんな悠久のむかしからあつたのだろうか、という問題である。決して、そうではない。げんに史実は、初めてギリシヤ語を話したといわれる彼等の先祖が、最初トロイアに王朝中心文化をつくったとき、いかめしい城堡を築いて住民を隷屬下に置き、のちに展開されるポリスとは全く違ったオリエント風の官僚政治によつたことを明らかにしている。そして、それ以後も、専制・寡頭・暴君政治といった非民主的政治に、いやというほどなやまされているのがギリシヤの実状である。

それなのに古代ギリシヤ人が、神界をそんな構成にしたのは何故だろう。それは、その後のギリシヤ各部族の理想とする統治方式を、神界に移し、理念上會議制を再現させた精神的オーガニゼーションとみるよりほかにないのである。

日本でも神代時代、記紀によれば、統治方式として天照大神の血縁關係で組織する神会があつて、その神会組織の中心にあつて八百よろずの神に君臨するのが天照大神で、この神は「一切の障害を打破して、その子孫の日本統治を」基礎づける構成になっている。これを指して、ある学者は「記紀の説話の原作者は天皇の有する宗教的權威を過去に投影して、天照大神を構想し、これを神会組織の中心にすえ、その神意を以て現実の政治的權力の由来を説明しようとしたのだらう」^⑩となしている。

注

①⑥ 家永三郎、日本政治思想史岩波版一四頁

九 神話と政治思想

ギリシヤ神話が、ホメロスやヘシオドスによって修正されたことは前述した通りである。日本の神話も、古事記が稗田阿礼ひえのあれの誦習をもとに、太安万呂おののやすまろが撰録した書物であり、書記もそれにならってできたことは衆知の事実である。

しかし、だからといって、この神話が無意義だとは思わないでよいだろう。なぜなら、たとえこしらえた神話にせよ、そうした神話のなかから、こしらえてまで神話を流すひとの思想と、それが神話として語られた事実から、その神話の聞き手や語り手の思想が忖度そんたくできるからである。換言すれば、神話をこしらえるほどの賢明な頭脳が、世間の受けいれない思想を神話におりこむはずがないから、当然それが勘定済みであること、したがって、その神話からは、それなりに当時の思想がよみとれる尊い資料だということである。^{①⑦}

そんなわけで、このギリシヤ神話からは、古代ギリシヤの当時、既に会議にかけて国を統治することが理想だと考えられたこと、日本神話からは、すくなくとも奈良朝なれあさのむかしに、既に合議制による国事決定が、当時の知識人にとって最も納得できる統治方式だったことが読みとれるわけである。

政治思想を論ずるとき、どうして神話がこしらえられたかの動機、ないしは誰によってこしらえられたかの詮索より、民族に伝統して語られた年輪、広く世間に流布された事実^⑮に、もっと焦点をあわせるべきではなからうか。ギリシヤ神話は、いくら作意されても、文芸的評価が高いから神話であり、日本神話は、歴史的なものと非歴史的なつくりごとがまじっているから、神代にまつゝる話でも、神話でないとなすのはどんなものだろう。

なぜなら神話は、非歴史的なものだつて、充分それでよいし、また誰かがつくらねばできないのだからである。作意したというだけで、日本神話をドイツ・ナチが流した人種的優越をこじつけるため故意にでつちあげた「廿世紀の神話」と同断すべきではないであらう。^⑯

注

⑭ こうした方式でヘブライ思想より、政治思想史に重要視される契約的思考を探索する好例については、拙著「中世政治思想研究」(有斐閣)四二二頁―四二四頁参照

⑮ なお本稿執筆に際しては講座「東洋思想」(東京大学出版会)第一巻、思想の歴史(平凡社)第一巻、日本の歴史(読売新聞社)第一巻より例証を採択した